

【顕在意識と潜在意識の原理①】

潜在意識というのは、想いの世界です。想いは目に見えませんが、物理学の視点から考えた時、目に見えないモノである素粒子以下の微視的世界のエネルギーであると考えています。日常で言うならば、心的現実と言えるでしょう。『どう思ったのか、何を考えたのか、どう捉えているのか。』こういった視点です。

一方、顕在意識というのは、カタチの世界です。物理学の視点から考えた時、目に見えるモノである原子レベル以上の巨視的世界であると考えています。日常で言うならば、物理的現実と言えるでしょう。『何が起こったのか、何を持っているのか、何をしたのか。』こういった視点です。

さて、心理学的な視点から考察していくと、実に顕在意識の原理と、潜在意識の原理は全く乖離していて、むしろまるっきり反対であると考えた方がつじつまが合います。ここでは、顕在意識のマクロな世界と、潜在意識のミクロな世界を対比させながら見てみたいと思います。

わたし達の現実社会では『何かをした時に罰せらる』という世界です。例えば、罪を犯したという事は、起こした行動が法的に反していたという事です。また、失敗の多くは行動の結果です。何かを買って失敗した。投資して失敗した。など、行動による成果です。ですので、わたし達の多くが失敗しないために、『行動しない』という選択をしてしまいがちです。行動しなければ失敗しないからですね。また、発言に関しても同じです。発言しなければ、間違える事もないし、恥をかくこともありませんからね。顕在意識的な現実社会では、それも1つの選択肢であると言えるのかも知れません。

しかしでも、潜在意識の想いの世界は全く逆で『何もしないと罰せられる』という原理なのです。

これはどういう事なのでしょう？ 顕在意識と潜在意識の基本原則から考えていくと答えが見えてきます。

目に見える世界である物質世界、つまり顕在意識の世界は、『止まっていることがデフォルト』です。ですので、動かすときにエネルギーが必要となります。動く事にエネルギーを費やします。今わたし達の目に映る全ての物質は停止しています。それを動かすためには、電化製品なら電気が必要です。もっとアナログなら、押したり、引っ張ったり、持ち運んだりする必要があります。わたし達の動作も一緒です。何かをするなら肉体を動かさなくてはなりません。

全て、顕在意識の物質世界は、『止まっている事がデフォルト』なのです。

さて、では目に見えない世界であるエネルギーの世界、つまり潜在意識の世界はどうでしょう？

潜在意識の世界は『動いていることがデフォルト』なのです。わたし達の想いの世界は止まることなく動き続けているのです。

例えば、物質を構成している素粒子は、絶対に停止することはありません。常に変化し続けています。想いの世界も一緒です。自覚できない、つまり無自覚な想いは常に発生し続けています。これは、脳科学で証明されています。わたし達が自覚したか、意識的に認識したかどうかは全く別問題として、脳内では、無自覚な想いが起きている時も寝ている時も発生し続けているのです。潜在意識は、わたし達の心臓を動かしている領域です。わたし達が生きている間ずっと潜在意識は心臓を動かし続けています。そして、潜在意識=神=宇宙=全体・完全であると前述しておりますが、これらは共に動き続けています。宇宙は動き続けていると考えると理解しやすいかも知れません。

ですので、潜在意識の世界では、止めることに膨大なエネルギーが必要となるのです。それは顕在意識の基準である動いているモノを動かすときのエネルギーとは遙かに圧倒的に違う膨大なエネルギーです。仮にたった1つの素粒子の活動を止めることでさえ、現代科学では不可能です。停止させる事ができないのです。動いている事がデフォルトである想いを止めるということがいかにエネルギーの必要なことなのかを想像してみてください。

潜在意識の世界は『動いていることがデフォルト』なのです。

顕在意識の世界は『止まっている事がデフォルト』、潜在意識の世界は『動いていることがデフォルト』

この二律背反的な原理が見事に融合し調和して働いているのが、わたし達の生きている世界なのです。

だから、顕在意識の世界であるわたし達の現実社会では『何かをした時に罰せらる』のです。止まっていることがデフォルトだからということに他なりません。

そして、潜在意識の想いの世界は『何もしないと罰せられる』のです。これは、動いていることがデフォルトだからということに他なりません。

例えばあなたが、電車に乗っていて席を譲ろうと想ったけど、恥ずかしいからやめたとします。このことは現実世界の原理では、あなたには何も起こりません。ですが、潜在意識の想いの世界を止めた、という事による膨大なエネルギーは想像を絶します。

わたし達の感じる不快を伴う疲れの大半は、精神によるものです。運動をして疲れた感覚は物理的現実ですが、心的現実としては、スッキリしていて爽快なはずですが、物理的現実としては、疲れというものは同一です。ですが、心的現実としては全く似て非なるものです。

わたし達の感じる不快を伴う疲れの大半は、精神が肉体に影響を与えているモノなのです。

その原因が「想い」を止めることによって発生するのです。

あくまでもわたし達の脳は、潜在意識（無意識）の土台に顕在意識（意識）が乗っているというシステムになっています。よって、大切なのは『どれだけ稼いだか、何を持っているか』ではなく、『これから何を体験し、何を感じられるか』なのです。

つまり、何を行動したかももちろん重要ですが、それより遙かに重要なのはどう想っているか、どう想ったか、なのです。

好意・行動の心的動機が重要なのです。これはもちろん法律にも適応されていて、講演でもしばしば紹介する「片桐被告」の実母殺害が1年半の執行猶予という判決に至ったのは、心的動機に悪意がなかったという裁判官の判断によるものです。

話しは少しそれますが、このことから考察していくと「得意な事をやろう」「得意なことを仕事にしよう」という現代の論調に、そのまま鵜呑みにせず立ち止まって考えてみたいのです。

得意な事をやろう、と言われてあなたはどう思いますか？

様々な考え方がありますので、どれが間違っていると言いたいのではないのですが、ここでは、得意なことをやっている時の心的動機に着眼したいのです。

あくまでも例え話ですが、マジックが得意な方がいたとします。その人は、マジックで人を欺いた時になんとも言えない優越感を感じ、それが心的動力源となってマジックがみるみる上達していったとします。この場合「得意なことをやろう」「得意なことを仕事にしよう」という論調に疑問が生まれます。この方がマジックをやり続ければ続けるほど、人を見下すという優越感という心とが育っていきます。これは決して良いことだとは言えません。

しかし、マジックを通して、エンターテインメントを通じて心を解放させてあげたいとか、日常の殺伐とした心に驚きという癒やしを注ぎたいとか、そういった心的動機だったとしたら、それはとても素晴らしいことです。

つまり、「得意なことをやろう」「得意なことを仕事にしよう」という論調は、一概に全面的に肯定できるものではないのです。このように、ある論調も原理やメカニズムから考えていくと自ずと答えは見えてきます。この時に必要なのは、鵜呑みにせず立ち止まって「考える」という事なのです。

わたし達の本質は、想いの世界です。想いは言葉になります。脳大成理論で言語を重要視するのも潜在意識の原理が背景にあります。

常に想いをチェックし、わたし達の心の中を誰に覗かれたとしても大丈夫、むしろ見てみて欲しいという自分でありたいものです。